

安全工学会は今年、副会長だった新井充東京大学・環境安全研究センター教授が会長に就任、新体制がスタートした。産業界を中心に安全に対する関心が高まりをみせるなか、同会は今年から保安力向上センター、総合安全工学研究所、災害情報センターと連携し安全工学グループを設立した。安全工学の研究、普及をはじめグループ内で果たすべき安全工学会の役割は大きい。

長く安全工学に携わってきた経験から課題に挙げるのはプレゼンス。通常、学会の評価基準は研究会や学会誌とされるが、安全工学は幅広い分野に跨る半面、学問として体系化が不十分で価値は低くみられている。「安全に関係した論文も個々の学会に投稿される傾向」が強いそう。

指摘するのが化学系の偏

安全工学グループの設立で役割一層大きく。 内外の交流深化に意欲

人と話題

安全工学会 会長



新井 充 氏

裾野を広げ存在感高めたい

重。「発祥だから仕方ないが、幅広い分野の会員を増やすことでプレゼンスを高めていく。他の学会が縦系であれば、当学会は横系を担える立場でありたい」と意欲をみせる。

一方、「日本はリスクに対しての考え方が全く出ていない」と教育の重要性を訴える。安全に慣れ過ぎたせいで危険

への感受性が弱くなり、マッチが擦れない、ナイフで鉛筆を削れない子供を増やした。「このままでは将来、国際社会で伍していけない。幼少時

からの素養を身につけなければ」と警鐘を鳴らす。

企業も同様で、「環境安全は目にみえず利益を生み出さな

は低い」と指摘。最近はその意識も変わってきたが、まだ道半ば。「伊藤東前会長（安全工学グループ代表）が提唱された環境安全をキャリ

今回、安全工学グループの設立によりグループ内の連携はさらに強化され、同時に安全工学会の担う役割も大きく期待されている。一つはその

アパスに組み入れ、若いころから教育すべき」と力説する。昨今の事故も設備に対するノウハウの伝承はあっても、起きた場合に対処できるノウハウの伝承はないからとも。

いまでも忘れられない事例がある。事故を起こした大手会員企業が経済的影響もあって所属学会を見直す際、当学会も脱退した。理由が事故だけに「安全工学を追求する当学会が他の学会と一緒に扱われたのは軽視で遺憾。プレゼンスの弱さを痛感した」。

知見。保安力向上センターは近々、安全工学会から独立し安全工学の普及拡大への起爆剤と目されるが、「安全工学会には（保安力向上センターに続く）新たなものを生み出す潜在力があり、それが使命」と次の展開も見据える。

具体化はまだとしながらも、弾みとなりそうなのが他学会との連携。これまでに化学工学学会や人間工学学会、さらに化学、機械、土木、建築などのさまざまな学会と交流、コラボレーションの深化も目指す。また、韓国をはじめ海外の学会との交流も積極的に推進。「世界的に日本の（安全工学の）レベルは低くない」と意欲をみせる。ただ、欧米では標準化の方向を模索しており日本にはない動き。そこはしっかり注視していく必要がある」と気を引き締める。

（聞き手＝野間勉）